

ベツレヘムの星 ～クリスマスは夏か？

イエスの誕生の時現われたという「ベツレヘムの星」についての記載は新約聖書のマタイ福音書のみでその出現自体にも疑問があります。当時の大文明国のローマ帝国にも漢帝国にもこの記録は伝わっていないのですから。しかし文献考証はさておき、とにかくマタイ福音書第 2 章の記述通り考えてみます。「あれは誤記事だ、これは捏造だ。」なんて夢のない話はやめましょう。

東方の博士たちがエルサレムに来てこう言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私達は、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」・・・（中略）・・・すると見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んでいき、その上にとどまった。

まず「東方」とはどこでしょうか？ユダヤから見て東方、その中で文化の中心といえばバビロンを指すと考えるのが妥当でしょう。バビロンは古代オリエントの文化都市であり、占星術も発達し、そこには星占いに長けた博士（＝マギ）もいたはずで、東方の博士



はこの星をかつてバビロンで見て、ユダヤに着いてから再び見たというのだから、同じような現象が 2 度あって

1 回目はバビロンで西天（ユダヤの方向）に見た。

2 回目はユダヤに着いてから見た、この日がイエスの誕生日。

と考えられます。

では「ベツレヘムの星」の出現はおおよそいつ頃でしょうか？当時ユダヤはローマの属国でしたが、ヘロデ王が在位していました。新約聖書によると彼は新しく生まれた子がユダヤの王になることを恐れて、乳飲み子のイエスを殺そうとしました。そのことを天使ガブリエルから聞いたマリヤとヨセフはエジプトに逃れ、イエスは幼年期はエジプトで暮らします。ところがユダヤにはヘロデという王は複数いて、父ヘロデ大王が亡くなり、息子のヘロデが継いだのが BC 4 年または BC 2 年といわれています。イエ

スが十字架に架けられた時の王は息子のヘロデですが、生まれた時はどちらかわかりません。細かいことは専門家に任せて、王位継承時期の前後と考えましょう。

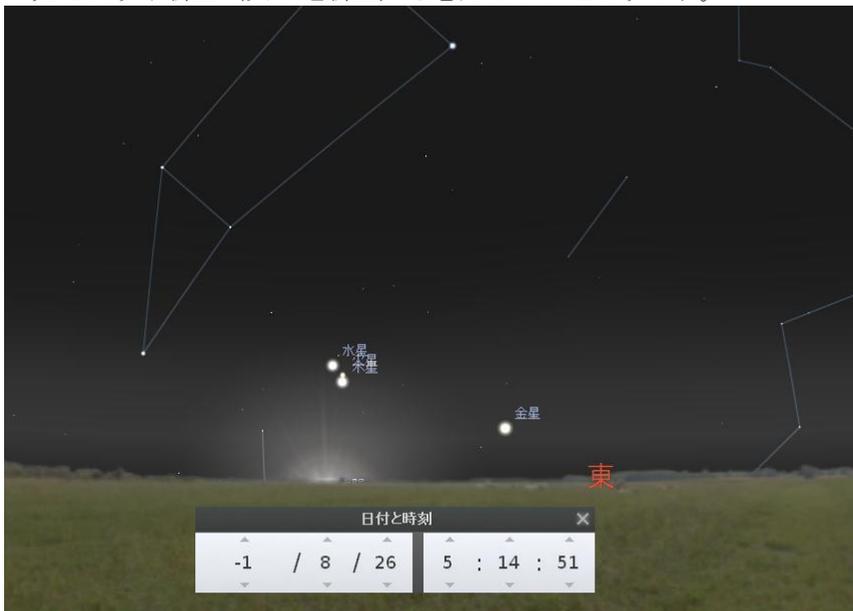
では突如明るく輝いた「ベツレヘムの星」の候補として何が考えられるのでしょうか？超新星・新星・変光星・彗星・惑星集合・その他・・・過去数百年間さまざまな説が提案されています。このうち初めの3つは恒星が突発的に明るくなる現象でそのうちの最も激しい超新星については3.2節をご参照ください。これらは「同じような現象が2度あった」という条件には適しません。彗星出現は夕方西の空に現れ、数日後には見えなくなり、その後日の出前に東天で見えるということが多いので候補となりえます。実際BC5年に現れていますが、その記録は中国だけで回帰彗星ではなく軌道はわかりません。この条件に最もふさわしいのはやはり惑星集合でしょう。

BC7年からAD1年までの1°以内の惑星会合のペアは10組以上も算出されますが、バビロンからユダヤまで歩いて旅をするならその間隔は2～3ヶ月でしょうから下表のようにBC7年とBC2年の天象に絞られます。

	日付	時刻	惑星	星座
①	BC7年6月10日	後半夜	木星 土星	うお
②	9月14日	終夜	木星 土星	うお
③	12月19日	前半夜	木星 土星	うお
④	BC2年4月5日	日没後	金星火星土星	おうし
⑤	6月17日	日没後	金星 木星	しし
⑥	8月26日	日の出前	水星金星火星木星	しし
⑦	10月13日	日の出前	金星 木星	おとめ
⑧	12月10日	日の出前	金星 火星	てんびん

BC7年に木星・土星がうお座で近づいたり離れたり3回連続して会合を起こしていますが、この会合は400年前ケプラーが計算（もちろん筆算）の上で発見したものです。問題の星が現れた時を①と②とすると、彼らがバビロンの西の空に見たのは6月10日の朝で、エルサレムで見たのは9月14日の真夜中となります。また②と③とすると1回目は9月14日の深夜で2回目は12月19日の前半夜となります。したがってベツレヘムの星は接近した木星土星であり、クリスマスは9月14日または12月19日となります。ただし土星は金星や木星ほど明るくないこと、両惑星は1度も離れ

ているのであまり目立った現象ではないことが難点です。1年間に3回連続して起こる会合を3連会合と言いますが、それは非常に希な現象で、実際に起こる年を計算してみると1800年から2300年の間に1821年、1940年、1981年、2279年のわずか4回のみです。しかしケプラーは1604年に自分が見たような新星（実は超新星）を想定していたようです。



一方BC2年に惑星たちは多忙な離散集合を繰り返します。④4月初に金星火星土星が、⑤6月中旬には金星木星が日没後西の空に集まります。特に6月17日の金星木星はほとんど重ならばかりの大接近です。その後これらの惑星たちは明け方の東の空に移り⑥8月末には日の出前に水星、火星、木星がコンパクトにまとまり、そのそばに金星がという4惑星の集合が眺められました。その後も⑦10月中旬には再び木星と金星が、⑧12月中旬には金星と火星が三たび接近します。12月には両惑星の左にベガが右に南十字が見られます。

このような目まぐるしい惑星の動きは何かが起こる前兆と東方の博士はきっと注目したことでしょう。1回目の天象は西の空で見たのだから6月17日の金星木星の大接近が最適です。2回目はその2ヶ月後の8月26日の日の出前にししの足元で起こった起こった4惑星の集合会合が最有力候補でしょう。ただし薄明の中、地平線近く日の出直前の短時間なので、その時雲ったら、東に山があったら全く気づかれず見逃されてしまいます。

逆にベツレヘムの星がユダヤ以外には記録がないのはそのためかもしれないとも言えます。もちろん今の日本ではとても無理ですね。次善の候補としては10月13日の金星・木星接近も挙げられます。

なおヘロデ王の王位継承時期からは離れてしまうのが難点ですがAD1年11月2日の日の出前に水星・金星・火星・木星の4惑星がてんびん座で集まっています。それに先立って8月11日に水星と金星が、9月14日に水星と木星が接近しています。4惑星が集合することは希で注目したいですが、あまりコンパクトではなく大きな明るい星の出現とは言いにくいです。なお、この間5惑星集合は起こっていません。

筆者は「ベツレヘムの星」とは

BC2年6月17日の日没後、バビロンで西の空しし座に金星と木星の大接近を見た東方の博士は、救世主の誕生を信じてその方向へ旅たった。8月にユダヤに着き8月26日の日の出前に見えた水星金星火星木星の集合がベツレヘムの星の正体であろう。

と考えています。これによるとクリスマスは夏になり、ホワイトクリスマス、そりに乗ったサンタさんなどは南半球でないと出会えなくなりますね。

参考文献

- [1]作花一志・中西久崇『天文学入門』オーム社 2001
- [2]<http://www.asahi-net.or.jp/~nr8c-ab/ktisrbethlehem.htm>
- [3]<http://astro.ysc.go.jp/izumo/christmas.html>
- [4]http://www.geocities.jp/todo_1091/bible/jesus/011.htm